

「忠なる実」
～神さまを心の中心に！～

箴 28：20
ルカ 12：40～48

「忠」という漢字にどういう意味があると思いますか？この言葉からよく連想される言葉に「忠実」「まめ」があります。「忠実」というのは英語で「Faithful」と言い、「献身」という意味があります。この「献身」には「私の心をあなたに捧げる」という意味があります。しかし、日本人の考える「忠実」は、儒教・仏教思想の入った偏った考え方になっています。「（お天道様に）見られているからやらなければならない」「忠誠を尽くさないと怒られる・バチが当たる」という考えで忠実になります。しかし、こんな忠実は正しいでしょうか？自分たちの本意でないことに忠実で自分たちは楽しいのでしょうか？私たちは本当の「忠実」を知っています。「忠犬ハチ公」ハチ公は見られているから忠実だったのでしょうか？あの犬が素晴らしかったのは、見るべき親方が死んだ後にどのような行動をとったか…です。ハチ公は親方が死んだ後も10年間駅に迎えに行き続けました。ハチ公の話を知ると皆が感動します。ハチの何が素晴らしかったのでしょうか？彼の忠実さですか？彼は拾われた恩返しをしているのでしょうか？違います。彼は心から本当に親方を愛したのです。だから親方のために・親方に会いたい一心で駅まで通っていたのです。ここから学ばされるのは、彼が忠誠心を示したくて行動したのではなく、どれだけ飼い主を愛していたかということです。私たちは「忠実にしなさい」と言われると「やらなければいけない・命令された」と勘違いしてしまいます。しかし聖書が教える「忠誠心」は「献身」です。これは、しなさいと言われるからやることではありません。その場所で自分が仕え・尽くす理由は、ただただ自分のために愛を流してくださった方がいてそれにこたえる「愛」なのです。私たちの心には元々そのような愛があります。だから本当の愛の姿を見ると感動します。誰が止めても・止めると言っても行動し続ける…私たちは今そんな気持ちで神さまに仕えているのでしょうか？また、私たちが愛する人にこのような気持ちで仕えているのでしょうか？「してやってる・やってあげる・見られてるからやる・命令されたからやる」そういうことではありません。神さまが今日私たちに伝えている事は「本当に愛して・その人のことが好きだから行動するんだ」という心をもう一度確認しなければならないという事です。（箴 28:20）私たちが本当に求めなければならないのは富ではありません。心の中心が何なのか、それによって実を結ぶ事が「忠実」の意味です。私たちの心の中心には何があるのでしょうか？心の中心に「こなす事・命令・しなければならぬ・恐れ・不安・恐怖心」そのようなものを心の中心において行動しても実に残りません。犬が可愛いのはなぜでしょう？彼らは体全体で喜び、心の中心に飼い主をおいています。だから仕える飼い主にオオカミが襲いかかってきても逃げることなく血だらけになっても忠実に飼い主を守るのです。自分の愛する人を守りたいという思いだけなのです。私たちが守ろうとしている事・しようとしている事、それはなぜでしょう？将来の自分のためですか？自分の計画がなるためですか？自分が評価されるためですか？だから忠実に動くのですか？せよと命令されるから動くのですか？もうこのような領域からは抜け出して深い領域で行動しましょう。（ルカ 12:40～48）この箇所は忠実に何かを行うという話ではありません。主人に何かを任された人が任されたことを忠実に行うのではなく人間関係について忠実にあれと言われていたのです。人の上に立つ者がどうあるべきなのかをこの箇所ですべて言っています。あくまで家の留守を任される事に関して神さまはその成果報酬を求めて忠実にあれと言っています。しかしこれはお互いにしもべ同士です。自分たちの下っ端や若い人たちにどう接しているかという話です。たとえそれが自分にとって立場が下の人であっても、その人のことを本当に愛しその人のために行う…だからそれは主人がいようがいまいがかわりません。私たちにあって今回大切なことは**①心の中心を神さまにしなければいけません**。私たちの心の中心が神さまになっているのでしょうか？神さま不在になると私たちは好き勝手に振る舞います。人との交わりの中で「愛を流している」という名目で自分の心の痛みを癒してもらおうとしたりします。愛を流しますが求めない…私たちが愛を流すのは受けるためではありません。ハチは飼い主から愛が欲しくて駅まで行っていたわけではありません。主人にただただ会いたいから迎えに行っただけなのです。ただ流し続ける愛だったので。私たちにあるのでしょうか？ただ愛を流し続ける・忠義を尽くすためにはこのポイントが必要なのです。本当の忠義とは「我の上に羊(主)をおき、心の中心を神さまにする」ことです。私たちの上に神さまの十字架があれば心の中心にもおかれま。前回お話ししたイチジク(外側の実)とブドウ(内側の実)の例えです。外側と内側が1つになるのです。「忠義」の「忠」はイチジク(外側の実)で「義」はブドウ(内側の実)です。「あなたがたがわたしを選んだではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためである」(ヨハネ 15:16) 私たちが神さまを選んだのではありません。私たちが行って実を結びその実が残る…その実は忠の実と愛の実です。私たちは本当に愛の実をもって出ているのでしょうか？私たちは心の中心にイエスキリストをおいて行動すれば無理と思ってしまうことでもできるのです。イエスキリストは私たちが心の中心においたから十字架にかかったのです。神さまは自らが神であることを捨てて人として来られました。私たちが捨てませんでした。私たちのために命をかけてくれた人が心の中心にいれば愛を流すことができます。ただ好きなんだという気持ちで「私の心の中心をあなたへの愛で満たしてください」とお祈りして心の中心に神さまをおきましょう。**②裏表をとりましょう**。あの人にはこう接してこの人にはこう接すると人によって態度が違うことが裏表がありということです。(マタイ 5:38～48)「目には目を」この命令をよく理解しなければいけません。目をとられたら目以上のものをもってはいけません。私たちが神さまの命令にたって裏表をとらなければいけません。見られてるから行うのではなく、神さまが好きだから・人のために・誰かのために行動しましょう。裏表をとって心から接すると気持ちは伝わりません。**③愛し尽くしましょう**。愛するのは簡単です。しかし尽くすのは難しいです。ハチ公は10年間尽くしました。誰かに尽くしている姿は心を打ちます。誰かが見てるからではなく、ただ愛し尽くしましょう。歴史的人物で勝海舟と坂本龍馬がいます。坂本龍馬は勝海舟を殺しに行っただけでなく、男惚れをして勝海舟の弟子になりました。元々は殺しに行っただけです。勝海舟の思いに忠誠心があったので自分を殺しに来た坂本龍馬でさえも感銘を受けて弟子になり、そしてその坂本龍馬の心が敵対していた者を引き合わせ和解させたのです。心に思いがある人は人の心を変えられることができます。私たちがどうでしょう。私たちの心に本当に思いがあるのでしょうか？「忠」という実があるのでしょうか？もしそれがあれば、飼い主だけでなく彼に出会う多くの人の人生に忠義をつくした忠犬ハチ公のように尽くすことの素晴らしさを伝えることができます。この3つのポイントを神さまの前で行うことができれば人の心を変えられます。私たちのすることは食べるのも飲むにも神の栄光をあらわすためである、大好きな人の栄光をあらわすためにする、そのような思いで祈っていきましょう。私たちが本当の意味で忠実であれば多くの人が私たちからその実を受け取るでしょう。しかし、命令や強制からされている忠義であれば多くの人が私たちの前から去るでしょう。私たちからどちらの忠実さが出ているのかしっかり吟味して行動していきましょう。

(要約者:行司佳世)